

---

# ある人形芝居師の夢

嘉月天空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある人形芝居師の夢

### 【NZコード】

N6242A

### 【作者名】

嘉月天空

### 【あらすじ】

花屋の娘に恋をした、人形芝居師の物語。

昔々、ある所に、  
幸せな物語しか演らない、人形芝居師の男がいました。

\*

わあや、みなさまお立会い！

『海賊王の宝』の話はしたつけね？ じゃあ今度はこの話にして  
う。

『アーリンヒとお姫さまの話』

「存知の方は？」 こりゃじゃない！ こりゃあ大変だ。すぐこ  
話をはじめなけりゃあ。

この話は、遠い遠い昔。ある国にお姫さまがお生まれになつた所  
から始まるのや。うう、じつは話だ。

\*

昔々、ある国に、それはそれは可愛らしくお姫さまがお生まれに  
なりました。

お姫さまの仕草は野の可憐な花のように軽やかで、その笑顔は太  
陽ですら恥ずかしがって顔を隠されるほどでした。

ところが、16歳の誕生日を迎えたちよ「ひその日、お姫さまはドラゴンにさらわれてしまったのです！

國中大騒ぎになりました。國の光とも言つべき美しいお姫さまがいなくなってしまったのです。

王さまはたくさんの兵隊を引き連れて、7つの山と7つの谷と7つの大河を越えて、お姫さまを取り戻そうとなさいましたが、ドラゴンには敵いませんでした。

王わまは、國中に『姫をドラゴンから救つた者に、姫を娶りせる』とこうお触れを出しました。

けれども、誰ひとりとしてお姫さまを助け出せる者はいませんでした。

一方、さらわれてしまつたお姫さまは、豪華なお屋敷に綺麗なお部屋、清潔な寝台と煌びやかなドレス、美味しい食事と親切な召使いを与えられました。

それに、お姫さまがすっかり怖いものだと思い込んでいたドラゴンは、とても親切で優しく、それにお姫さまを怖がらせないために人の姿を取り続けていました。

お姫さまはとても不思議に思つて、ドラゴンに「わたしを食べるためにもうつたのではないですか？」と尋ねました。

「ドラゴンはびっくりして答えました。

「もちろんです。あなたののような美しい人を食べるわけがありませ

ん

「では、どうしてわたしをうつたのですか？」

お姫さまがそう尋ねると、ドラゴンは真つ赤になつて口「もりました。

「…………私はあなたを好きになってしまったのです

お姫さまはわざとよつもずつじゅつじびっくりされました。  
恐ろしさと思つていていたドリゴンが可愛らしく思えたのです。

「では、どうして正式に求婚なさつてくれなかつたのですか？」

「私はドリゴンです。だから、きっとあなたのお父上が断つてしまつと思つたのです」

お姫さまはそれはもつともな話だと思いました。王さまは賢明な方でしたが、頑迷な所も持つ方でしたからです。

「では、今、正式に求婚なさいと下せこませ」

お姫さまが微笑みながら言つて、ドリゴンは首をかしげました。

「何故ですか？ 私はあなたを無理矢理連れてきてしまつたので、すつかり嫌われてしまつたと思っているのです」

「無理矢理連れてこられるのはわたしも嫌ですけれど、求婚されてついていつたならそれは当たり前の事ですわ」

お姫さまは、このドリゴンをすつかり好きになつてしまつていたのでした。

ドリゴンの妻になるという手紙を貰つて驚かれたのは、王さまとお妃さまです。ふたりは、お姫さまが脅されてそう手紙を書いたのだと思い込んでしまわれたのでした。

王さまは大層お怒りになつて、國中に『姫をドリゴンから連れ戻した者に、姫と國の半分を与える』といつお触れを出しました。一方、お妃さまは、あまりの事に病を患つてしまわれました。

ある旅の王子さまが、ちゅうどいの國を通りかかり、お触れを眼にしました。

旅の王子さまは、ドリゴンにさらわれたお姫さまを憐れに思い、

助けようとなせました。

ところが、二つの山と二つの谷と二つの大河を越えて「ドリゴン」の城に辿り着いた王子さまは、お姫さまが「ドリゴン」と大層仲良く暮らしているのを見て、大変驚かれました。

王子さまはお姫さまと「ドリゴン」にわけを尋ね、お姫さまが「ドリゴン」に囚われているわけではないと知りました。

また、お姫さまも王子さまから国の様子を聞き、母上であるお妃さまが病にかかっているのに心を痛めました。

「ドリゴン」はお姫さまが哀しむのを見て、王子さまは、「どうかお姫さまを国まで連れて行ってください」とお願いしました。

驚いたのはお姫さまです。

「何故そんな事をおっしゃられるのですか?」

「私と一緒にいると、あなたはいつまでも経つてもお母上に会えません」

「ん」

涙を流す「ドリゴン」に心打たれた王子さまは、ふたりにひとつつの知恵を受けました。

\*

さてさて、それからどうなったと思つかね?  
わからぬいかい? じつはつたのさ。

\*

お姫さまは無事、「ドリゴン」の城から王さまやお妃さまの元へ帰つてきました。

王さまとお妃さまは、お姫さまを連れ戻してくれた青年にとても

感謝し、約束通りお姫さまと、国の半分を『えました。

もちろん、王さまとお妃さまは「存知でいらっしゃらなかつたのです。

その青年が、実はドリゴン本人だといふことはね！

「ひして、お姫さまとドリゴンは、末永く仲良く暮りしました。めでたしめでたし……。

\*

ひして話を終えると、人形芝居師の青年の元に、向かいの花屋の娘が駆け寄ってきました。

「お疲れさま。今日のお話、とっても素敵だつたわ」

「ありがとうございます」

青年は真っ赤になつて微笑みます。

「今日は何のお花を買つていいくの？」

「じゃあ今日は、そこガーベラを」

青年がそう言つと、娘は一番綺麗なガーベラを手にとりて、丁寧にリボンを結び、青年に渡しました。

「ねえ、お話の代金は花で、本当に良いの？」

娘が困つたように呶つ言つと、青年は「もちろんだよ」と答えました。

「君は僕の一番のお客さんだからね」

そう言われて、娘は嬉しそうに胸を張りました。

「もちろんよ！ あなたの入形劇は全部見てるもの！ 他にも人形

芝居師はたくさんいるけど、あなたの話が一番大好きなの。だつて、いつも幸せなお話なんですもの」

青年は照れくさそうに頭をかきました。

青年は、花屋の娘を好いていたのです。

けれど、勇気が出ずには、告白する事ができないでいたのです。

そのかわりに、彼女のために幸せな物語だけをたくさん、たくさん語りました。

\*

ところが、ある日、青年がいつものように人形芝居をしようと花屋の前を通りかかった時、娘が見知らぬ男の人と楽しげに話しているのを見てしまったのです。

その見知らぬ男は、仕立ての良い服を着ていて、お金持ちのようでした。

青年は、花屋の前で人形芝居をするのをやめてしまいました。

\*

それからしばらく経つて、青年と娘は街中でぱったり出合ってしまったのです。

「人形芝居屋さん！ 最近どうしたの？ 来ないから病気でもしたのかと心配してたのよ」

「…………うん、その……少し、体調を崩していたから……」

青年が言い訳をすると、娘は心配そうな顔で彼の顔を覗き込みました。

「そういえば、顔色が悪い気がするわ。早く帰つて休んだ方が良いわよ」  
「ううだね、そうするよ」  
「ええ、早く元気になつてね」

別れの挨拶をして、青年が立ち去ろうとするとき、娘が言いました。  
「元気になつたら、またお芝居を見せてね。私、とっても楽しみにしているから」

青年は、次の日、花屋の前で人形芝居をしました。  
花屋の娘だけのための。娘に向けたお芝居です。

それは、こんな物語でした……。

\*

昔々、ある国にひとりの人形芝居師の青年がいました。  
彼は、毎日彼の人形芝居を見てくれる花屋の娘を愛していました。  
花屋の娘は明るく、青年にとても優しくしてくれたからです。

まだ青年が花屋の娘と出会つたばかりの頃、こんな事がありました。

青年が劇で使う人形の服を繕つていた時、一本しか持つていなかつた針を落としてしまったのです。

青年は必死に探しましたが、小さな針は見つかりません。段々と日が落ち、足元が見難くなつていく中、青年が途方にくれていると、花屋の娘がやってきて針と一緒に探してくれました。

結局針は見つかりませんでしたが、娘はすっかり日が暮れるまで一緒にになって探してくれたのです。

こんな事もありました。

青年がお金に困っている時に、娘がそつとパンを差し入れてくれたのです。

こんな事もありました。

青年が、幸せな話しかしないのを馬鹿にしたお客がいた時、青年よりも早く、そのお客にくつてかかったのも花屋の娘でした。

彼女は、いつも必ず、青年の人形劇を見て、それがとても好きだと言つてくれました。

けれどある日、青年は花屋の娘が知らない男と仲良く話しているのを見てしましました。知らない男は、仕立ての良い服を着た、お金持ちのようでした。

嬉しそうに話す花屋の娘を見て、青年は花屋の娘を諦めようと思いました。

ろくな収入もない人形芝居師では、彼女を幸せにする事もできないと思いましたし、それに彼女に告白しても迷惑にしかならないと思つたのです。

青年は、もう花屋の娘に会わない事を誓いました。

しかし、ある日偶然、青年は娘に会つてしまつたのです。娘は青年のとつさの嘘にも気付かず、親切にしてくれました。それに、青年の芝居をまた見たいと言つてくれました。

青年は、娘を諦める事ができない自分に気付いたのです。

青年は、娘に好いてもらいたいと思つてゐる自分に気付いたのです。

青年は、もうどうしたら良いかわからなくなつてしましました。

\*

話を聞き終えた花屋の娘は、青年に向かつて言いました。  
「とても哀しいお話ね」

それから怒つたように付け加えました。

「それにその青年は馬鹿ね！ どうして気付かないのかしらー！」

青年は不思議そうに娘を見上げます。

「その花屋の娘も青年が好きだつて事をよ。それでなきや暗くなるまで針を探したり、お腹が減つて辛そうな時にパンを差し入れたり、青年の事で他の人に腹を立てたり、青年を心配したりしないわ！」  
青年は目を丸くしました。

「言つておきますけどね、その話に出てきた知らない男の人つて、私の伯父さんよ！ あの日は叔父さんのお友達が結婚式だつたから良い格好をしていただけ。別にお金持ぢじゃないわ！」  
娘は真つ赤になつて叫びました。

「ホラ！ 早くハッピーポンドにしてちょうだい！ 私あなたの幸せな物語が大好きなんだからー。」

\*

え？ その後どうなつたかって？

最初に言つただろう。

“ 幸せな物語しか演らない、人形芝居師の男がいました” ってね。  
そう、これで『ある人形芝居師の夢』 つてお話はおしまい。  
めでたし、めでたし……ってね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6242a/>

---

ある人形芝居師の夢

2010年10月11日03時31分発行